第209回

果菜類の猛暑・干ばつ、台風後遺症

今年の夏～秋は、猛暑や干ばつ、さらに複数の台風襲来もあって、その後遺症のために11月には入荷減の単価高という状況が生まれた。12月から年明けについても、早めの寒さ到来などから、西南暖地も遅れや不作傾向が目立ち、強保ち合いが見込まれている。そもそも高温や日照を好む果菜類は、「干ばつに不作なし」といわれているため、猛暑はあまり影響しないだろうと見られた。一方、東北産地は震災と放射性物質問題もあって、あまり高値は期待できないという見方も。しかし結果として、関東産地の被害が意外に大きく、夏秋の果菜類については高値推移だった。複合要因が背景にありそうだ。

トマト

猛暑の影響は8月ではなく9月に。入荷増の北海道産に意外な高単価

【概況】

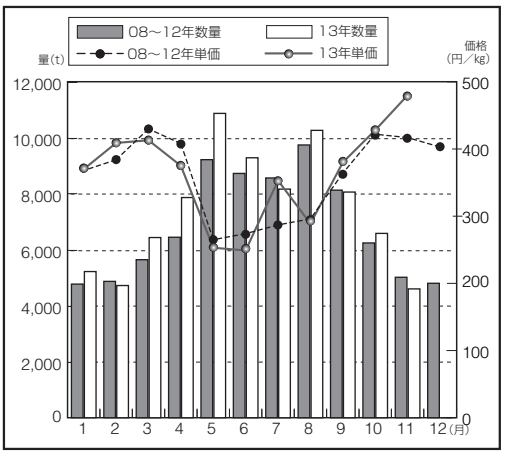
東京市場における今年の入荷動向を見ると、前半については西南暖地産の春トマトの出荷も多く、潤沢な出回りだった。これが関東から東北に移行する7月は、作柄の遅れなどで端境期状態で入荷減の単価高になった。猛暑ぎみの天候が続いたものの、8月には関東の高冷地産、東北も順調で一気に入荷が増えた。ところが、9月には作柄の進みすぎと高温障害による花落ちなどの複合要因で、一気に入荷減で高くなった。

【今後の対応】

今年の夏秋トマトは、多かった昨年に比べ入荷が少なく、単価は好調だった。目立ったのは福島産が昨年同様の入荷量をキープして健闘したことと北海道産の入荷拡大である。東北産地は福島産を含め単価は横並びでそろっていたが、北海道産は増えたにもかかわらず、高単価推移だった。原因としては、高温期に色回りなど品質をそろえ、棚持ちが良かったこと、それに加えて福島産など東北産を敬遠する機運がまだ一部残っているということだ。

【背景】

8月の入荷は例年急増する。東北産地が一斉に出荷してくるからだ。その意味では、同月時点で猛暑の影響は見られない。福島産地でさえ多かった昨年同様、数量をそろえてきた。しかしそれ以上に、今年は北海道産が前年より26%も増えている。秋は関東産の抑制物に移り、さらに九州産地などに切り替わるが、今年は干ばつの影響が東北よりむしろ関東産地に大きく、端境期状態が発生するとともに、11月には東海産地や九州産地などが遅れた。



キュウリ

影響が大きい台風絡みの大雨。「キュウリビズ」の効果が出たか

【概況】

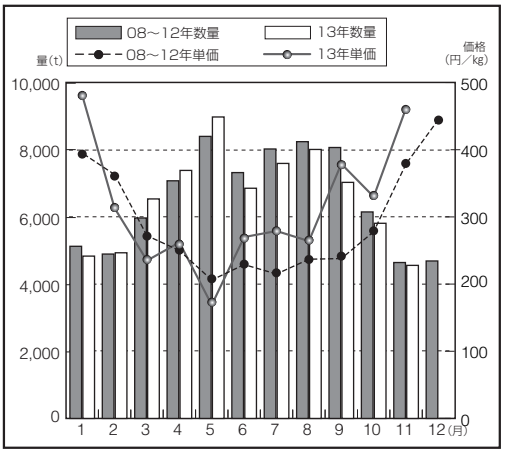
東京市場の今年の入荷動向を見ると、トマト同様に前半は潤沢な入荷があったが、6月に激減して単価を上げた後、夏場から秋まで平年を下回る入荷減推移が続いてきた。8月には急増するパターンが今年は発生せず、秋には関東の抑制物も遅れ、11月にも関東産の早めの切り上がりと西南暖地も出荷遅れが重なったため、強含み推移は重油の高騰もあって年明けまで続きそうだ。今年の夏は台風絡みの大雨の影響が大きい。

【今後の対応】

夏場の東北6県による「キュウリビズ」が定着した。福島産がTOKIOを起用して、シズル感のあるいいCMを打っていることも効いているようだ。夏場には、スーパー各社が相場の安定する盆明けに売り出し企画をそろえてきている。猛暑にこそ効く企画だが、一方で過激な暑さはやはり生育に問題が発生しがち。今夏も、売り出し需要に入っていても、計画どおりの入荷がなくて相場が不思議な高騰現象を見せることが多く、納入業界を疲弊させた。

【背景】

8月の入荷は多かった前年より15%少なく、この月の圧倒的な主産地である福島産は今年、42%のシェアがありながら前年より17%も落とした。ところが、単価は他の東北産地に比べ2割も高い。ことキュウリに関する限り、数量がまとまることが量販時代における望ましい産地ということになる。原発問題はもう陰も見られない。それにしても、今年は秋以降の関東産地の遅れが目立つ年になったが、急激な寒さは西南暖地に影響をもたらしている。



今年の市場相場を読む

流通ジャーナリスト
小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。㈱農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙『新感性』、月刊『農林リサーチ』を発行。著書に『日本を襲う外国青果物』、『レポート青果物の市場外流通』、『野菜のおいしさランキング』などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

ナス

群馬産減少の要因は台風か。暑い夏に一気に増えて値ごろ販売

【概況】

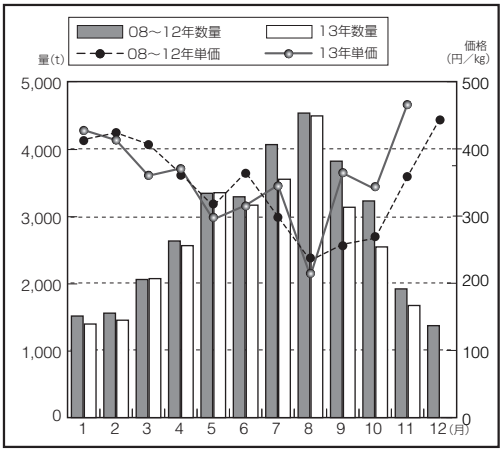
東京市場の今年の入荷動向を見ると、4月までの西の産地からの入荷は多くなかったが、例年どおり関東産地が本格化する5月には急増した。しかし、夏に向けて思ったほど増えず、毎年ピークとなる8月も平年の水準を下回った。秋には10月まで潤沢のはずの関東産が高騰ぎみ。11月にも高知産がなかなか増えず、この秋は高値推移になった。群馬産を中心として、台風による雨や風の影響が大きかったためである。

【背景】

同じ果菜類でもナスだけは夏秋に東北に移動せず、関東産が半年を引き受けている。しかし近年の猛暑傾向で、関東産でも露地栽培の比率が高い群馬産の出荷量が減っている。代わって施設化率が高い栃木産が増えていてほぼ均衡する産地になっており、この2県で8月の供給の6割以上を受け持つ。今年は8月の急増で単価を大幅に下げたが、9月以降の残量がなかったことで単価を上げた。猛暑と台風の影響がダブルパンチ的に効いたものだろう。

【今後の対応】

夏場は九州産などの長ナスの端境期だが、入荷する冬春期に比べ夏秋には3倍近い入荷量があり、冬場のほぼ半値になることは意外に知られていない。果菜類のなかでも日照や高温が好きな品目で、できた分がそのまま出荷されて供給が厚くなっているのだ。出回り量が増えて単価がこなれれば、消費者は自然に購入を増やす。秋ナスはうまいということになっているが、むしろ夏秋には潤沢に出回って食べる機会が増えるためだろう。



ピーマン

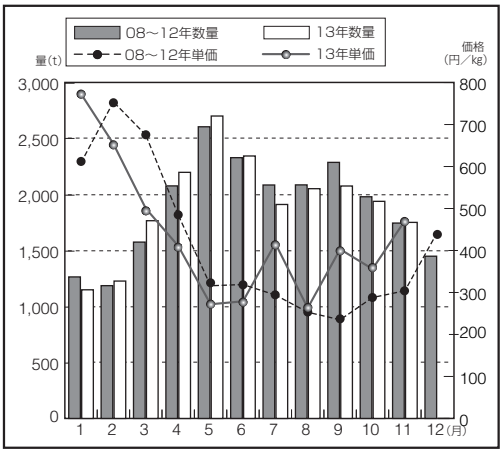
東北・関東産地は猛暑で入荷減る。夏秋期に西の産地が増える傾向も

【概況】

東京市場の今年の入荷動向は、年明けから春まで西南暖地産の潤沢な入荷で安かった。6月以降の茨城など関東産に切り替わると、7月には入荷が少なく高騰し、8月に入って落ち着いたものの、9月には東北の夏秋産地からの出荷が少ないことでまた高騰した。以降についても茨城産の切り上がりが早く、11月には西南暖地産が大きく遅れたことで高騰した。東北産地も関東産地も、入荷減の原因は猛暑の影響だと見ていいだろう。

【背景】

8月を受け持つはずの岩手など東北産地が昨年より15％も少なく、今年は茨城産が供給シェアを上げて奮闘した。昨年は、福島産が原発事故絡みでやや敬遠機運があったが、今年は昨年実績を7％上回る入荷があり、単価も平均単価より15％程度安かったものの、昨年の単価より8割近く高値になった。同じく昨年はやや安かった茨城産だが、8月に関しては平均単価を4％上回る好相場だ。原発絡みの影響はピーマンについては徐々に低下している。

【今後の対応】

他の果菜類に比べ夏場のピークは小さい。むしろ、初夏と秋口に入荷が増えるのはナスほど高温を好まない品目だからだろう。夏秋物でも大分など西の産地が生産拡大している理由だ。ただし、夏場にはピーマンも含め、果菜類は売り出し企画が多い。安くなるタイミングが重なればいいのだが、意外に計画どおりに入荷しないことが少なくない。売り出しの値ごろは袋当たり60円が上限だ。相対価格をこの範囲に収めようとするセリ人も多数いる。